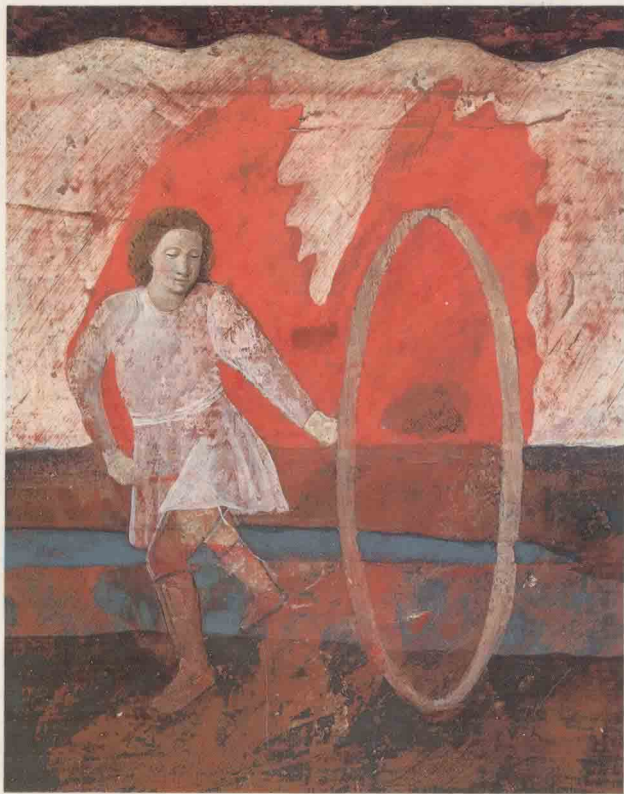


真夏の犬

宮本輝

teru miyamoto



文藝春秋

真夏の犬

teru miyamoto

宮本輝

文藝春秋

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

庫奥に生れる。追
学部卒業。一九七
で第十三回太宰
七七八年、「螢川」
川龍之介賞を受
七八七年、「優勝」
川英治賞を受け
螢川」「幻の光」
「道頓堀川」「錦
「流転の海」「春
猫」「ドナウの旅
愁」「優勝」「夢見
丑千回の生死」「花
開楽の園」「海岸列
果」「二十歳の火影」
記「異国の窓か
追行く人たちと」
マ」がある。

真夏の犬
まなつ いぬ

一九九〇年三月二十五日 第一刷

(定価はカバーに
表示してあります)

著者 宮本 輝

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表〇三二六五一一二二

本文印刷所 理想社印刷

付物印刷所 大日本印刷

製本所 大日製本

万一、落丁乱丁のある場合はお取替致します

目次

真夏の犬
7

暑い道
31

駅
53

ホット・コーラ
71

階段
93

力道山の弟

115

チヨコレートを盗め

139

赤ん坊はいつ来るか

163

香炉

187

あとがき

212

装丁 菊地信義
装画 有元利夫

真夏の犬

真夏の犬

ぼくの住んでいるところから、歩いて十五分ばかり北へ行くと、その年の夏、日本人で初めて、ヨットで太平洋を横断した青年の実家があった。その話題で日本中が大騒ぎをしていたので、ぼくの友だちも、その英雄の家と両親をひと目見ようと、しょっちゅう誘いに來たが、ぼくは行けなかった。

それまで、雀莊ジャンゾウに入りびたっているか、もしくは一週間も二週間も行方をくらまして、家に帰ってこなかった父が、突然、大金を持って帰って來、これから毎月、この倍近い収入があるのだと、幾分昂揚した口調で言ったあと、ぼくにその仕事を手伝うよう命じたからだ。

だから、その年、中学二年生のぼくは、夏休みの後半すべてを、大阪の北西部に位置する工場街の、そこだけ閑散と静まり返って、近辺に滅多に人の姿の見られない、だだっ広い空地で、朝早くから日が暮れるまですごすはめになった。

父が、高額の定収入を得る仕事を思いついたのは、行きつけの雀莊の主人の何気ないひとことからだったそうだ。雀莊の主人には、腹違いの弟がいて、その男は大阪中古車部品組合の世話役

だった。組合に加盟している中古車部品屋たちは、仕入れてきた廃車の置き場所に困っている。土地はだんだん高くなるし、中古車部品の業界はジリ貧傾向で、廃車を積みあげるための土地を持つ余裕はない。雀荘の主人は、そんなことを常連客の誰かに話したあと、

「あいつらも、所詮、小商人こあきんどやから、組合の使い方を知りよれへん」

と言った。父は、その組合の理事の中に、昔の知人がいることを思い出したが、同時に名案も思いついたのだった。組合で金を出し合って、どこか空いている土地を借り、そこに各々が仕入れてきた廃車を置けばいいではないかと。

ぼくは、父がどうやって千五百坪の空地を大阪市内で捜し出し、その持ち主とどんな契約を結び、いかなる交渉の末に、組合の意見をまとめて金を出させることに成功したのかは知らない。だが、放蕩で山師みたいな性分の夫の、何度も事業を旗上げしてはつぶし、そのたびに借金取りに追われるという生活に疲れ果て、長く定収入のないことで憔悴しょうすいしていた母が、まるで天から降ってきたかのような商売と、それによる大金のほとんどを手渡された際の表情は、ぼくまでで飲みのあまり、アパートの部屋の隅で、でんぐり返りをさせたほどだった。

母は、そんなぼくを微笑みながら見やり、大金を胸に抱いて、

「お父ちゃんは、やっぱり、いざとなったら頼りになる人やなア」

と震える声で言った。

ぼくに与えられた仕事は、朝の七時から夜の七時まで、その廃車置き場に坐っていることであ

る。タイヤや、まだ使える部品を盗まれないように見張っていればいいのだった。

ぼくは、近所に住む青年が、ひとりでヨットに乗って太平洋の横断に成功した三日後、つまり昭和三十七年八月十五日に、福島西通りから市電に乗り、千鳥橋へと向かった。ナップ・ザックの中には、麦茶と、母が作ってくれた弁当、それにトランジスタラジオが入っていた。夏休みの残りを、仕事の手伝いで費やす代償として、前日の夜、父が日本橋の電機店で買ってくれたのである。

千鳥橋で市電から降りると、ぼくは父が書いてくれた地図を頼りに、海とは反対側への道を歩いて行った。市電の停留所の前に、小さな商店街があったが、メタンガスのあぶくが湧くドブ川に架かった橋のところまで来ると、もうそこは小規模な工場が密集する地帯だった。

ぼくは橋を渡って右に曲がり、ドブ川に沿った道を進んだ。あちこちに、工場の煙突が見えるのに、そしてそろそろ出勤の時間なのに、ぼくの視界には、行けども行けども人間の姿は映らなかった。あるのは、臭い川と工場と、錆びた有刺鉄線で囲まれた空地と、そこに群生する雑草だけである。

やがて、〈山川物産〉とペンキで書かれた倉庫の壁が見えた。倉庫は三軒並んでいて、その手前の広い空地には、すでにきのう運ばれて来た廃車が四、五十台置かれてあった。車が通れるだけの幅にわたって、有刺鉄線は切断され、丸められて、フロントガラスのないシボレーの屋根に載せてあった。ぼくは、廃車の並ぶ空地の真ん中で立ち停まり、日陰を捜した。一台の、とりわ

け大きなダンプカーは、廃車ではあったが、ほとんど原形のままで、空地に敷かれた穴ぼこだらけのコンクリートに菱形の影を落としていた。ぼくは、そのダンプカーの周りを居場所に定め、麦茶の入っている水筒と弁当箱を出し、ナップ・ザックを敷いて、そこに腰を降ろした。

ぼくは、たった三十分のあいだに、何度時計に目をやったことだろう。三十分という時間が、どれほど長いかに感心し、このまま夜の七時まで見張りつづけることに、退屈を通り越して、ある種の恐怖を抱いたほどだった。

ダンプカーの周りの影は、太陽と一緒に動いた。ぼくは、ダンプカーの周りを、時計の針と同じ方向に、少しずつ移動しなければならなかった。あんなにも欲しかったトランジスタラジオを買ってもらったというのに、ぼくが、そこから聞こえてくる声や音楽に心を傾けなかったのは、想像以上の暑さのせいもあったが、たとえ廃車にせよ何十台もの車があり、倉庫があり、見渡せば工場の建物が見えていながら、あたりに人の気配が微塵も感じられなかったからである。

動きを停めたかのような時間と、うだるような暑さと、必ず近くにいるはずの人間の気配が遮断された場所に何もせず坐りつづけていることは、たった二時間のあいだに、麦茶の入った水筒を空^{から}にさせた。

ぼくは、最後の一滴を舌に垂らすと、廃車置き場から川沿いの道に出、市電の停留所まで小走りで行った。薄暗い商店街にある食堂に入り、かき氷を注文して、年老いた主人の目を盗み、大

きなやかんから水筒に麦茶を移した。時間をかけて、かき氷を食べ、食堂のコップで麦茶を何杯も飲み、廃車置き場に戻った。その時点で、時計の針は、やっと十時をさしていた。

昼になると、影は、ダンプカーの下にしか見当たらなくなった。仕方なく、ぼくはダンプカーの下にもぐり込んで、弁当箱をあけた。グリース油や重油の匂いが頭上にあった。工場のサイレンを遠くに聞きながら、ぼくは弁当を食べた。そうしているうちに、この相当な年代物のダンプカーは、シャフトやスプリングのことごとくが腐っているのではあるまいかと考え始め、いまにもシャシーが折れて、下にいるぼくをぐしゃぐしゃにつぶしてしまいそうな気がしてきたのだった。

しかし、そんなぼくの不安をかき消したのは、弁当の匂いに誘われて、どこから集まって来た六匹の野良犬たちである。

犬たちは、長く垂らした舌の上に泡を載せ、低い唸り声を立てて、ダンプカーの周りを取り囲み、ときおり威嚇するかのよう、背中の毛を逆立てた。ぼくは、残っていた玉子焼きふたきれと焼いた鱈子を遠くへ投げた。野良犬たちが一斉にそこへ群らがった隙に、水筒とトランジスタラジオをつかんでダンプカーの下から這い出て、そのまま市電の停留所まで走り、アパートに逃げ帰ったのである。

その夜、ぼくは、もうあそこには行きたくないと父に言った。狂犬病の犬が十匹もいた、と。「あほんだら！ それでもお前は男か。何のためにチンポの毛が生えてきたんや」

父はそう怒鳴って、九月になれば、バラック小屋を建て、守衛を雇う予定だが、それまでは、お前に手伝ってもらうしかないのだと、ふいにさとすようにつけくわえた。ぼくは、部屋の隅で膝をかかえ、

「どこにも逃げるところがあらへんねん。車の中に入ったら、暑さでミイラになってしまふでエ。あしたになったら、もっと、ぎょうさんの野良犬が来よる。みんな狂犬病にかかっとんねん。噛まれたら、ぼくも狂犬病になるやんか」

と半泣きになって訴えた。すると父は、どこかに出かけるためにドアを開きかけ、
「あそこには野良犬はいてるけど、俺が見た野良犬の中に、狂犬病にかかっているのは一匹もおらへんかった」

そう言い残して、扇子で胸のあたりをおおぎながら出て行った。それまで無言でいた母が、食卓の上を片づけてから、

「あした、お母ちゃんの日傘を持って行き。そのダンブカーの荷台に乗ってたら、野良犬が来ても安全やろ？」

と言った。ぼくは、母に背を向けて横たわり、

「どんなに暑いかな、お母ちゃんは知らんや。日傘なんか、何の役にもたてへんわ」

そうつぶやいて、壁を蹴った。ぼくも母も、てっきり雀荘に行つたとばかり思っていたのだが、父は一時間もたたないうちに帰って来て、油紙に包まれたパチンコをぼくに投げてよこした。そ